

## 〈翻案小説〉をめぐる

——渡辺霞亭の『想夫憐』と李相協の『再逢春』を中心に——

洪 善 英

### 一 はじめに

李相協<sup>1)</sup>の翻案小説『再逢春』は彼が一九一二年日本留学から帰朝し朝鮮総督府の御用紙『毎日申報』に軟派記者として入社した直後に書いたものである。一九一〇年前後の韓国には多くの日本の小説を原作とした翻案小説が盛んに出版されたが、それらの作品が概ね〈家庭小説〉と称されるものであったという点はしばしば指摘されてきた。<sup>2)</sup>そしてそのため、韓国の同時代の〈新小説〉の通俗化をもたらしたという負の評価<sup>3)</sup>までが、日本文学作品の翻案にはある。その背景には一九一〇年の韓国併合以後、自国の文学営為において厳しい局面に置かれていたという、政治的、文化的状況が影を落していた。それゆえ、一九一〇年代における日本の小説を原作とする〈翻案〉という事象に注目したとき、同時代の韓国、日本の歴史的文脈の中にテクストを改めて位置づけることが重要である。

本稿では、日本の文学作品が〈翻案〉をとおして一九一〇年日本の植民地となった「朝鮮」という異なる言語と文化的環境の中へ流通し、韓国人読者向けの小説として成立したとき、如何に書き換えられたかを検討していきたい。そして『再逢春』をオリジナルとコピー、あるいは原作と翻案という二項対立的な読み方ではなく、『想夫憐』という日本語小説が〈翻案〉をとおして韓国の歴史社会の文脈の中に取り込まれていく過程に注目する。そのとき、一つのテクストが異文化、異言語空間に置き換えられたとき、新たなテクストとして機能するという視点が必要であろう。<sup>3)</sup>

## 二 「家庭向き」のゆくえ——〈家庭小説〉が植民地に向けられたとき

『想夫憐』は一九〇三年『読売新聞』に連載されたものであり、単行本出版の後一年ほどの間に七版を重ね、さらに明治三〇年代の家庭小説、家庭劇の流行とともに新派劇の主要演目として取り上げられた。『想夫憐』の作者渡辺霞亭は、明治二〇年代半ば頃から大正に至るまで主に「家庭婦人の健全なモラル」を描き大衆作家として文名を高めた人物である。当時日本において「こんな小説は屹度読者受けがよい」、あるいは「家庭小説としての『想夫憐』は世に出た当時大分家庭向きの歡迎もあつた様」であると評されるなど、通俗的なお涙頂戴の家庭小説という評価がほとんどであつた。

一方、韓国近代文学研究における翻案小説『再逢春』の評価は、この作品が腐敗した両班と「賤民」出身である人物を対立させることで前近代的身分制度の問題を積極的に取り上げているとしている。ただ、先行研究において諸論者の間で『再逢春』が翻案である点が共通に認識されていないためか、翻案小説としての意味合いは問題にされなかった。そこで、その内実を明らかにするために、まず『再逢春』が『想夫憐』を媒介にした上で現れた作品であることを出版当時の言説から探ってみよう。『再逢春』を出版した東洋書院は、出版当時次のような広告文を出し、

この本は日本で最も有名な傑作小説「想夫憐」を意識したものである。先日、文秀星一行が大意を抄出し演劇として上演したので、その内容を知っている者もいるだろうが、朝鮮の人々をして同時代的にすることと、朝鮮の家庭に幸福な家を築かせるという一片の丹誠から特にこれを出すのである。

（『毎日申報』一九二二年九月二十五日 拙訳）

と、『再逢春』が日本の小説『想夫憐』の「意識」であることを明らかにしている。日本において大衆小説、大衆演劇として成功を取めた『想夫憐』が、韓国においては「最も有名な傑作」といった出版側の宣伝が説得力をもつにはそれなりの背景があつたに違いない。というのは、『再逢春』が渡辺霞亭の『想夫憐』の「意識」として韓国語に翻案されたのが一九二二年八月のことであるが、『想夫憐』が韓国で紹介された正確な時期はそれより遡る。ソウル（当時京城）の日本語新聞『京城新報』によると、実は霞亭原作の「想夫憐」が一九〇八年九月すでに寿座で演劇として上演されていたので

ある。また一九一一年の一年間に限ってみても、渡辺霞亭原作の『想夫憐』『松風村雨』『吉丁字』『黄菊白菊』などが同じくソウルの「歌舞伎座」「寿座」のような日本人経営の劇場の演目として取り上げられていることが確認できる。その中でも、『想夫憐』はそれぞれの劇場と劇団によって一年間四回にわたって公演されている。すると、『想夫憐』は韓国語による小説の翻案以前にすでに韓国に演劇として流通していたのである。さらに、流通は単に日本人居留民の間だけでなく、文秀星という韓国の劇団によって演劇として上演されており、翻案小説の出版前にその内容を知っている韓国人の観客層が存在していたということになる。このように、『再逢春』が翻案小説として現れる前に『想夫憐』は日本語による演劇としてソウルの日本人経営の劇場で上演され、次は韓国語による演劇として、また後には翻案小説として出版されたというのは、演劇というジャンルにおける大衆的成功が、さらに小説化の動きにつながったのではないかと推察できる。そのことは十分留意されねばならず、その検証がなされた上で翻案小説出版というプロセスが考察される必要がある。これは一九一〇年代韓国における日本文学を原作とする大衆演劇の受容のあり方と、翻案小説の成立の特徴として指摘できるが、この点に関しては別稿を用意して論ずることにする。

以上述べたように、多数の筆名で新聞連載小説の多作の作家として知られている霞亭の活躍ぶりは日本にとどまることなく、一九一〇年前後には韓国のソウルにまで流通し、それぞれのジャンルにおいて新しい読者と観客に迎えられていた。日露戦争前後の日本における資本主義時代が商品として流行の文学を大量生産し、それらが一九一〇年代韓国においても「通俗文学」として盛んに流通するようになったのは渡辺霞亭の『想夫憐』の翻案『再逢春』の一例に尽きるものはなかったことは、これもやがて別稿で明らかにしたいと思っている。

まず、『再逢春』が翻案小説であることを作品の中から指摘するために、作品の全体の構成、モチーフ、あらずじなどを確認しよう。『再逢春』の女主人公英子は、実は「賤民」出身の娘であるが、資産家として成功した「開化人」であり「賤民」である白聖達（はくせいだ）が娘英子の幸福を願って「両班」の養女にし、身分を隠して李均栄（いこうえい）という名門家に嫁がせた。そして、その英子の弱点をにぎる養父許均（きこう）という人物が、英子を事あるごとにいじめ、金品をせしめてゆくという展開となっている。ある日、実父白聖達が英子と夜陰に会ったことが他の男と不義をしていると姑にいじめられ、英子は素性の秘密があるため、真相を打ち明けられず、ついに家出する。ところが、夫李均栄は「万民平等」の信念を貫き、彼は許均に「私はあなたの養女英子を離縁し……白丁の娘を妻に迎えます」と宣言し、家族の反対をものともせず、妻英子を向えに

いってエピソードとなる。以上のあらすじから『再逢春』は物語全体において筋、モチーフを『想夫憐』とほとんど共有している。と同時に、『再逢春』には『想夫憐』における物語の中心空間や時代、人物を韓国のそれに置き換えられているが、それを表示すれば、次の通りである。

中心空間	時代	人物
『想夫憐』 京都加茂川の辺 大阪 嵯峨野	日本の明治三〇年代	岩崎一彦 京都加茂川の辺 華族、大学中退  岩崎雅子（中野雅子） 一彦の妻 新平民（「穢多」） 清助の実娘  中野清助 大阪 雅子の実父 大阪西浜町（渡辺村） 新平民（「穢多」） 高納税の資産家  小泉修蔵 休職海軍大尉
『再逢春』 ソウル玉洞 開城 タップコルの尼寺	韓国の開化期	李均栄 ソウル玉洞 両班、開化党  許英子（白英子） 李均栄の妻 賤民（「白丁」） 聖達の娘  白聖達 開城 英子の実父 東村成均館 賤民（「白丁」） 資産家  許均 前陸軍副領

吉田お玉		ゲスン 南山サンナムコル出身 李家の女中
岩崎家の女中		
		ゲスンの叔母、スチヨル

以上それぞれの作品の登場人物のなかから人物像の異同をみると、まず『想夫憐』が昔ながらの淑やかさと可憐さを失わぬ女性「雅子」を、『再逢春』が儒教的道義に忠実な女性「英子」をそれぞれ登場させている。また『想夫憐』における「多額納税者」に数えられるほど「巨万の富」を得た資産家中野清助は、『再逢春』において学問を身につけた知識人であり「開化」に強い志向性を示している白聖達に変身している。白聖達は、「真鍮製の器物と皮革」を生産する職業を代々伝えてきた、いわゆる「白丁」である。二人とも「新平民」「白丁」という「賤民」出身であるため、世間から「除者」扱いをされている人物である。そして華族岩崎一彦は若き青年紳士李均栄に再造型されている。李均栄は三年間の世界遊覧の後、帰朝した「両班」であり、京城中央の政争を避け、静かに暮らしている「開化党」の政客である。一方、墮落した海軍大尉小泉修蔵は、陸軍副領許可に置き換えられ、いまでは両班としての体面を維持することのできない許均は、白聖達を身分的蔑視に満ちた態度で応対し、義娘英子の貞淑と温順を利用して彼女の弱点を脅迫し、結婚指輪などを担保に金品をものにしていく悪党ぶりを見せる。彼こそ新しい時代に乗り遅れ没落していく両班の象徴でもある。

両作品は「姑の嫁いじめ」といったモチーフを共通にし、『想夫憐』が昔ながらの淑やかさと可憐さを失わぬ女性「雅子」を、また『再逢春』が「女必従夫」という儒教的美德に従う女性「英子」をそれぞれ登場させることで、古き慣習に愛着を示す多数の読者と観客に親しまれたのである。「家庭小説」と角書きされたこの翻案小説は、同時代性と健全な家庭像の提供という出版側の意図もあって、「家庭向き」という性格と古き儒教的倫理観を調和させた読み物としての「通俗」的趣向が認められる。日本において明治三〇年代を風靡する家庭小説が江戸期から継承された家の思想や制度を改造すべく、西洋伝来のキリスト教的家庭文学によって「嚴肅純潔なる家庭」という新しい時代の家庭像が描写され、さきの「通俗」性とともに家庭的であることが期待された点は、韓国においても同様であったといえよう。

一方、中野清助・雅子と小泉修蔵・貞子という善悪の対立を軸にし、岩崎一彦の介入と小泉の改心による善の勝利といったものが『想夫憐』の構造であるとすれば、『再逢春』において白聖達・李均榮は開化人、許均・李の母は古い時代を象徴する人物として再造型され、開化対固陋あるいは近代対前近代という対立構造で物語が展開されている。このような人物間における対立構造が〈翻案〉を通して微妙にずらされることによって『再逢春』は原作と異なるテーマ性を帯びることとなる。それでは、『想夫憐』と『再逢春』をそれぞれの作品のなかに生じる出来事や状況が織りなす歴史的文脈の中にテクストを改めて位置づけることから始めなければならない。

### 三 『再逢春』の書き換えの戦略

#### 三― 「南山の麓蕨葺きの小屋」から始まる物語

『再逢春』には『想夫憐』にみない場面、人物などの創作も施されているが、たとえば、『想夫憐』の冒頭部が、

吉田お玉が十六歳の初奉公に、好き便手ありて、京都三本木岩崎家の奥様の小間使に上りたるは、さる年の三月五日、雛祭漸く終りて、庭の白桃唇を解く折なりき

（『想夫憐』一頁）

と、京都の「岩崎家」から始まっているのに対して『再逢春』は、ソウルの「南山の麓蕨葺きの小屋」から始まっている。原作にないこの冒頭部の場面はこれから展開される〈翻案〉物語の方向性を暗示するものとして読みとれる。

ソウルの南山の麓、双木村（サンナムコル―引用者）のはずれに蕨葺きの小屋が一軒ぼつねんと立っているが、長い間手入れもしておらず、庭はすっかり荒れ果てて、屋根の上には雑草が茂っている。しかし、周りの自然の景色は風景写真のようにきれいで、家の裏は南山が刺繍を施した屏風のように囲んでおり、家の前には京城の街が広がって

いる。

〔『再逢春』一頁 拙訳〕

「ソウルの南山の麓」に、住居環境も劣悪で荒れ果てた貧しい庶民の住処、「葉葺き小屋が一軒ぼつねんと立って」おり、南山がその家を「刺繍を施した屏風」のように囲んでいるという情景が描かれている。ソウルを象徴する南山に「葉葺きの小屋」を配置させ、その家からは京城の市街を眺められるという冒頭部の空間が、〈翻案〉という機能が働く最初の場面である。この「葉葺きの小屋」は、李家の女中、ゲスンの実家で、彼女の家族は、南山の麓の村のはずれに住み、「袋、ひも、帯、デニム（男子のパジの裾を締めるひも——筆者）などの織りものをして生活」を営んでいる。こうした『再逢春』における物語の空間描写の後には、ゲスンがソウルの南方から北方へソウルの中心を横切って歩くという場面が続いていて、それぞれの場所にはソウル城内における没落両班・貧民、中人、特権両班の居住地域という朝鮮王朝末期の階層の棲み分けが色濃く残っていた、ソウルの姿を浮かび上がらせてもいる。さらに、原作には見られないプロットとして物語の結末で英子とゲスンの二人の女性がゲスンの叔母と彼女の息子「スチョル」が雲山の鉾山へ出稼ぎにいくまで一緒に暮らした住処を尋ねる場面がある。ゲスンの叔母はスチョルとともに『再逢春』において新しく虚構された人物で「ドインジョン村」に住んでいる。姑のいじめと出身の秘密を夫に打ち明けることができず家出をした英子が、身を隠す場所を探して東大門の外にある「塔村の尼寺」に向かう途中、ゲスンに出会い、彼女と一緒に「塔村の尼寺」の付近に住んでいるゲスンの叔母のところに一日泊まることになる。ゲスンの叔母に会ってみたら、彼女は「スチョルの母」で昔英子の乳母だったので、この夜、思いがけない邂逅のうれしさに三人は夜が更けることも気にせず「泣きながら笑いながら楽しい話、悲しい話を語り合」う場面は象徴的である。というのも今は李家の両班夫人となった英子、彼女の実父は白丁であり、ゲスンとゲスンの叔母はもともと「奴婢」と呼ばれた賤民出身であるからだ。奴婢というのは両班支配を支えてきた隷属身分であり、売買されうる存在として両班の所有する財産としてしかみなされず、世襲される「賤民」であった。その点では「白丁」も同じであった。ゲスンの叔母とスチョルのような底辺階層の架空人物を登場させることで、白丁出身の白聖達と英子とともに新しい時代の到来を示唆しており、こうした『再逢春』における人物の創作はソウルの都市空間・身分的住み分けの俯瞰とともに、〈翻案〉の戦略として捉えられる。

## 三——「四民同等」と「万民平等」の間

『想夫憐』における「華族」（岩崎家）と「新平民」（中野家）の登場は、「解放令」（一八七一年）によって「士・農・工・商」の区別が無くなった後においても新たな「四民」——「皇族」・「華族」・「平民」・「新平民」——という構造が残存されつつあったことが投影されている。『想夫憐』における中野清助は、過去「非人」扱いをされた賤民が、今は同等な人間として平等な「国民」であることが認められたはずだが、「新」という印が付された「新平民」であることにはかわりがなかったことに、彼は閉塞感を感じていた。それゆえ中野清助は、

もし階級のあるために、悪人でも天下を横行し、善人でも人交りが能きんといふやうなら、この世の中は暗闇だ、現に私の持つて居る金の前にも、髭の生えた人が叩頭するではないか、すれば金は平等だ、人間ばかり不平等といふ筈は無い

（『想夫憐』一六三頁）

といい、「人間の階級をうち破ろう」といった願望の裏返しに、「金は平等だ、人間ばかり不平等といふ筈は無い」と抗弁する。明治三〇年代的不平等の現状に感じる閉塞感が彼を社会へのむなしい抵抗へと駆り立たせるとともに、そこには「金」に執着する資産家の姿がある。中野清助と彼の娘雅子は、豊かな財力をもつ資産家と絶世の美人という人物に造型されることによって《異質性》が強調され、さらに岩崎という華族出身の青年が彼らを救済するという紋切り型の「新平民」物語が用意されている。結局、『想夫憐』は《差別／被差別》の偏見を多分に含めており、弱きを憐れみ悪を憎むといった常識的正義感を越えていない点から、「華族」と「新平民」の結婚哀話というモチーフは小説の色彩にすぎないという批判も避けがたい。しかし見方をかえれば、日露戦争前後の日本における「平等」という問題のありようを投影しているともみならずこともできる。そもそも「国民」としての平等の権利を求める志向性と、「国民」の範囲の制限を内包する人種主義を表裏一体のものとして発生せしめたのが『想夫憐』なのである。とすると、「華族」と「新平民」の結婚哀話というモチーフが小説の色彩にすぎないというより、むしろそれに仮託して「社会階級」の問題を国民国家の当面の課題



——国民統合——として扱ったものと読むべきではないだろうか。つまり「国民」としての平等が保証されるために「納税」と「徴兵」という義務を果たさなければならない。たとえば、『想夫憐』の一年後、『大阪朝日新聞』懸賞小説に当選した『琵琶歌』という「新平民」兄妹の物語がある。『想夫憐』の清助が多額納税者であることと、この『琵琶歌』の荒井三蔵が戦争に赴くという物語の設定は、「納税」と「徴兵」の義務を果たすことによって、身分秩序を克服して「国民」という均質性を保証するための平等を目指したものと捉えられるが、そこには日露戦争前後における日本社会が克明に反映されているといえよう。ただそれでも、旧来の身分的な階層秩序をある程度残存させたままであったことは言うまでもない。この両作品が日露戦争前後のほぼ同じ時期に新聞連載小説欄を毎日埋めていき、さらに植民地へと流通していたことは、「家庭向き」小説がどこを向いていたかを示唆してくれる。

それでは、『想夫憐』が翻案をとおして開化期韓国の社会構造と歴史のなかに置き直されたとき、そのテクストには如何なるイデオロギーが浮かび上がってくるのだろうか。翻案小説『再逢春』は時代背景においても甲午更張（一八九四）<sup>14</sup>以後、両班（李均栄家）・賤民（白丁と奴婢）<sup>15</sup>「白聖達家」<sup>16</sup>「ゲスン」という朝鮮王朝時代の身分構造が残存されている開化期という歴史的文脈の中に置き換えられる。白聖達が「人間の階級を打ち破つて遣ろう」といった時の「階級」というのは、「両班・奴婢」という身分秩序を意味している。朝鮮王朝時代の、身分構造というのは、「奴婢制」というものであった。しかし、農民の成長、奴婢の身分上昇などが進むにつれ、多数の両班と少数の常民・賤民という構造に変貌していたが、両班層が支配階級の特権両班と没落両班という形で両極化するなかで、伝統的身分制度を解体し、法制化したのが「甲午改革」である。この改革の「公私奴婢の典を一切廃止し、人身売買を禁ずること」によって、奴婢制は終止符を打ち、従来もつとも過酷な差別を受けてきた白丁をはじめとする賤民に対しても、「駅人・皮工（白丁）は、並びに免賤を許すこと」によって制度的な差別は撤廃された。しかし、儒教的礼儀と名分を厳しく規定していたこの国は、限られたソウル城内の宅地を階層別に配分していただけではなく、敷地の面積や家屋様式、服装にいたるまで規定し身分的差別化を図っていた。したがって白聖達について、

開城松岳山麓に風流極まり華やかなる邸宅が一軒立っている。その屋敷の主は自ら、もつと早く開化人になるべきだったと嘆いてやまないという、白聖達である。

と述べられているのは、実は歴史的に意味深い。というのは、巨万の資産家である彼の「開城松岳山麓」に位置した邸宅はその規模や様式において身分的差別化を無視したものになるからである。また、白丁たちが身分を表す平涼笠を被って歩くような屈辱を強いられていた当時、白聖達の服装はペレンイと呼ばれた平涼笠ではなく、「白いドルマギ（男性用の長い上着——筆者）」に洋行帰りの紳士が用いた「バナマ帽子」をかぶるといったものであった。両班から庶民に至るまで家屋の敷地面積や服装まで整然と規定されていたことを考えると、たとえ庶民がいかに裕福であっても、華美で高層（特に王宮より）の邸宅を構えることは望めないことであつた。とすると、白聖達は服装から屋敷にいたるまで自ら「賤民」という身分から脱却し、新興資本家として変身を図つたのである。

それに対して、『想天憐』における中野清助の「金は平等だ」という論理は、少なくとも「四民同等」が「国民」の一人として制度的に獲得されるのは「納税」によつて保証されるという点に裏付けられる。とすれば、「現に私の持つて居る金の前にも、髭の生えた人が叩頭するではないか、すれば金は平等だ」という彼の「金」の論理は差別を超越する生き方として説得力を持つ。ところが『再逢春』の白聖達はどうかであつたか。

もし階級があるために悪人でも身分さえ高ければ高飛車に出、善人でも身分が低ければ人と交際もできないというなら、この世は混沌の世界だ。至高無私の神様はどうして同じ人間のなかに必要のない差別というものをお作りになったのだろうか

（『再逢春』一四〇—一四二頁 拙訳）

「白聖達」は彼が置かれた社会を「混沌の世界」と認識し、中野のような「金は平等だ」という論理は持てなかった。ただ、神の前ではみんな平等であるはずだという彼の「開化人」たる意識のみが読みとれる。そして、「真鍮製の器物と皮革を以て資本にし」、「牛と犬の解剖を以て学問にして」というように、白聖達は資本と学問を身につけた知識人であり、「開化」に積極的な人物として再造型されている。彼が「もっと早く開化人になるべきだった」と嘆いたように、「開化」

というものこそ彼にとって平等をもたらす価値であった。人々の間に頑固な差別意識が残存していることに絶望し、「人格と能力」にしたがって「社会の地位が定まるべき」だというのが、長い間身分の束縛から逃れようとする中野清助と白聖達にとってもっとも切実な「平等」というものの内容であるはずだ。しかしながら、この二つのテキストにおいて「平等」を獲得する手段が、一方は「金」、もう一方は「開化」というように、異なった価値観が追求されたのはなぜだろうか。その答えを得るために、『再逢春』における「万民平等」という言説に注意してみよう。

……多年間、文明国の風物に馴れて万民平等を主張する人物なので、活発な男子がどうしてこれほどの些細な、階級の問題にこだわることができるのか。

（『再逢春』二〇三頁 拙訳）

李均榮は「万民平等」を主張する、文明思想を身につけた「開化党」の青年紳士、すなわち、白聖達と同じように「平等」と「開化」という思想の持ち主として再造型されている。両班出身の李が「階級の問題」にこだわることなく、「賤民」出身の英子を妻として認めることに踏み切った。それは、両班たちの儒教的名分論に対して白聖達のような民衆を平等な人間として認めることを意味する。そしてその背景には「文明」という観念を用いることで「万民平等」への志向が実現されるという『想夫憐』にはみえない言説が盛り込まれている。特に身分的差別を無くすことを、原作では「四民同等」という言葉で表現されたものが、『再逢春』には「万民平等」という言葉を選んでいくことに注意したい。また、それは「文明」と「開化」を獲得したとき、はじめて実現されるものになっているのだ。『再逢春』における「平等」の問題は、物語の舞台にしている開化期の韓国が諸外国から平等国として扱われ、そのことが強いて独立の獲得となることを望むという、知識人たちの切実な現実認識の文脈の延長線上にあったことをうかがわせる。確かに「平等」というものが、他国と対等になり同等の権利を得るためにこの国において最も切実なものであったろう。

しかし、『再逢春』における「平等」の言説が「開化」と「文明」という近代化志向の「啓蒙」と結びついているにもかかわらず、テキストの歴史性がそれを裏切ることはいさしは起こってしまう。それは『想夫憐』に描かれた「平等」というものが、翻案に当たって、近代的ヒエラルキーを内包するイデオロギーとして『再逢春』のなかに新たに機能するか

らである。

三—三 今は秋、再び逢う春へ

『想夫憐』の岩崎一彦、『再逢春』の李均栄が身分を超えた結婚に立ち向かうとする同じ場面においてこの二人の心境は次のように描かれている。

岩崎一彦只一人、嵯峨野の奥の八千草に恨みの露を踏みしだく、身分には高下あれど、時世には転りあれど、人の心に渝り無き、この胸の悲しみを何処の月か照らすべき、何処の風や吹き払ふべき、と心の中に嘆じながら西をさしてぞあこがれ行く。

〔『想夫憐』一二七頁〕

〔……〕皎々たる月の光すら奥深い心には届かず、肌寒い秋風も重苦しい胸を晴らすことはできず、巻煙草に心を慰み遠くの山を眺めている。いつの間にか電車が東大門前に着いたので、すぐ降りて散歩がてら山の細道に入ると、秋草の露は涙のように足を濡らし、風に揺れる老松は悲しみを告げるかのように聞こえる。〔……〕

〔『再逢春』二〇六頁 拙訳〕

一彦の「胸の悲しみ」は、妻に対する憐れみであり、また、彼は世の中は「身分の高下あれど」、また「時世には変わりあれど」、妻への「心に渝り無き」を以て身分を超えた結婚へ立ち向かう。これで『想夫憐』における「華族」「新平民」という身分的差異と、それによって生じる葛藤は〈夫婦愛〉によって乗り越えていったという物語が完成をみる。

しかし、『再逢春』における李均栄が「白丁」出身の娘を正式に妻として認めることを決心したにもかかわらず、彼は「重苦しい胸を晴らすことはできず、巻煙草に心を慰み遠く山を眺めて」いた。「万民平等」を自らの結婚問題にかけて実践していこうとする李均栄は、まだ妻の身分の秘密を家族に打ち明けることができなかった。そして未解決の問題を抱えていたため、李は妻を迎えにいく途中、「遠くの山を眺め」ながら佇んでいたのである。差別的身分制度が打破された

にもかかわらず、かつて制度が生み出した伝統と因習は厳然として人々の心を捉えていた。李均栄が結婚の問題ですぐに  
対立している母親と、血族結婚を避けるために破談になった後にも、婚約を未だに守っている叔姫という二人の女性  
は、古い伝統と因習にとらわれている。彼らの存在は、李均栄にとってこれから抱えていかざるをえない内なる韓国の民衆の  
姿である。それゆえ彼らを啓蒙し「開化」と「文明」へ立ち向かわせる使命を背負いつつ、妻を迎えに行く李均栄の足下  
に「秋草の露」が涙になり、「風に揺れる老松」も悲しんでいるのである。

ここで『再逢春』の「春」の情景が描かれている冒頭部と「秋草の露」に終わる後半の、春と秋の季節の描き方は対照  
的ともいえよう。「ソウル南山の麓蘂薺葺きの小屋」の荒れ果てた姿からはじまった冒頭部に戻ってみよう。

さらに家の周りは種々の花が咲き乱れ綺麗な色彩を競い合い、蝶々は花々の間を飛び交い春色に戯れ、鳥は木々の  
間を往来し友を呼ぶ。万物が皆時を得たように喜びあい、まるで世に春が訪れたことを誇っているかのようである。  
また春の季節を迎えられたことを造物主にお礼を言うかのようでもある。

（『再逢春』一頁 拙訳）

「蘂薺葺きの小屋」を囲む自然の万物が春を迎えて、「世に春が訪れたこと」を誇り、また「春の季節を迎えられたことに  
造物主にお礼を言うかのよう」に喜び合う姿が描かれている。そしてこの物語の結末の季節である秋に、二人の結婚は全  
国の新聞に報道され「階級区別の弊習は打破されていくことが明らかなので、実に朝鮮民衆全体に慶賀すべく」と、後日  
の追記の形をとって締めくくられている。春が来れば万物に光輝生じ、一千万朝鮮民衆は今、「運命がわれらを追い出し  
た彼の楽土」で秋を迎えたようなものだが、やがて永久の春は輝き微笑むであろう。しかし、果たしてそのまま受け取る  
べきなのか、このテクストをめぐる歴史的背景を考えた場合、稿者には疑問である。そのことを次の「おわりに」で新た  
な問題提起にしてみよう。

#### 四 おわりに

以上『再逢春』の舞台配置と人物の創作のもつ意味を原作『想夫憐』と照らし合わせながら考察した。そこには朝鮮王朝時代の身分構造が都市構造や服装、あるいは人の心に伝統や因習として根深く残存している開化期の韓国社会に置き換えた〈翻案〉の戦略が認められた。ソウルを象徴する南山に「藁葺きの小屋」を配置させた冒頭部は〈翻案〉という機能が働く最初の場面である。そこにみられる物語の空間配置は、階級差別的な棲み分けが残されていた、ソウルの姿を描いたものとして読める。その描写には、ソウル城内における没落両班・貧民、中人、特権両班の居住地域という朝鮮王朝末期の〈奴婢制〉に代表される前近代的身分構造が残存している現実への批判と、底辺階層の架空人物を登場させることで新しい時代の到来といったテーマが捉えられている。とくに開化対固陋あるいは近代対前近代という新たな対立構造で物語が展開され、白聖達と李均栄という人物の再造型に現れているように、「平等」というものは「開化」への希求と表裏する価値観であった。そのことは『想夫憐』において身分的差別とそれによって生じる葛藤が〈夫婦愛〉に収斂されることとは異なる文脈に置かれていたことがわかる。身分を超えた結婚というモチーフを取り上げたこの日本から発信された〈家庭小説〉は、「朝鮮民衆」の再び逢う「春」の希望に書き換えられようとしたのである。

以上のように、『再逢春』という翻案小説を開化期韓国の社会構造と歴史の中に置き直したとき、たとえそれに植民地的状況が影を落としているにせよ、翻訳者は近代化志向が新たな文脈として盛り込まれた「啓蒙」の書として意味づけることができる。この点においてこの作品は、今まで韓国近代文学において異端的存在としてしかみなされなかった、一九一〇年代における日本文学の〈翻案〉という存在の可能性を問い直すきっかけを与えてくれるであろう。特に『再逢春』には、近代化志向と植民地的状況からの脱皮という問題を同時に抱えていた韓国的状況が、〈翻案〉テクストのなかに投影されていたといえよう。

しかしながら、本稿の視点からすれば、そのなかこそ、脱植民地化を前提とする近代化と、植民地主義の立場による近代化、という相反する歴史的コンテクストの問題が混在していることを見逃すことはできない。つまり、一九一〇年代植民地〈朝鮮〉における啓蒙と独立という韓国の近代化の課題は、植民地主義に基づく近代化と矛盾しつつ常に共存していたということである。そのもつとも適切な例が〈翻案〉テクストであった。『想夫憐』に描かれた「平等」というものが、近代的ヒエラルキーを内包するイデオロギーとして『再逢春』のなかに機能する可能性がそれである。

つまり、『想夫憐』において「金」に象徴される資本と納税が「平等」を保証されるものになったのと同じように、平

等主義という近代的言説の裏返しには、世界を「文明国」と「野蛮国」、「開化国」と「半開化国」とに分け、帝国主義による植民地経営を正当化するヒエラルキーが含まれていた。『再逢春』という翻案小説が近代化への啓蒙と規定することによって、近代化に乗り遅れた植民地の民衆は「啓蒙」の対象として教化（支配）されたり、しばしば排除されることも余儀なくされるからだ。

## 註

(1) (1883-1957) 小説家。ジャーナリスト。ソウル出。号は何夢。李用雨の長男。普成中学を経て官立漢城法語学校終了。一九〇九年来日、慶応大学に留学。一九二二年帰国、毎日申報社に入社。一九一八(三才)編集長になる。三・一運動に衝撃を受け、しばらく記者生活から退け、新文館に閑与。一九二〇年四月『東亜日報』創刊に専念、初代編集長になる。作品に翻案小説『再逢春』(一九二二)『貞婦怨』(一九一四)『海王星』(一九一五)、新小説『涙』(一九一七)『貞婦怨』(一九一八)『ムクゲ』(一九一八)などがある。

(2) 〈表〉一九一〇年前後における日本語小説の翻訳翻案(作成 稿者)

翻訳翻案小説(韓国)		原作(日本)	
一九〇四年	訳者未詳『経国美談』	一八八三年	矢野龍溪『経国美談』
一九〇八年	玄公廉訳『経国美談』翻訳		
一九〇八年	具然學『雪中梅』	一八八六年	末広鉄腸『雪中梅』
一九二二年	李相協『再逢春』	一九〇三年	渡辺霞亭『想夫憐』
一九二二年-一九一三年	趙重桓『双玉涙』	一八九九年-一九〇〇年	菊池幽芳『己が罪』
一九二二年	趙重桓『不如帰』	一八九八年	徳富蘆花『不如帰』
一九二三年	金字鎮『榴花雨』		
一九二二年-一九一三年	鮮千日『杜鵑声』		
一九二三年	趙重桓『長恨歌』	一八九七年-一九〇三年	尾崎紅葉『金色夜叉』
一九一五年	『続長恨歌』		

- (3) ただしこの作業は、ある翻案小説の原作を見つけ出し両方の作品の関係を確定することによって、オリジナル・テキストの特権化を試みるものでもなければ、また翻案小説の創作的価値を評価することによって原作と翻案という力関係を逆転させるということを説明するものでもない。
- (4) 高木健夫「新聞小説にみる日露戦争」(『新聞小説史・明治篇』図書刊行会、一九七四年)
- (5) 正宗白鳥「本郷座の『想夫憐』」(『読売新聞』一九〇四年一月七日)  
生「本郷座の『想夫憐』」(『読売新聞』一九〇七年一月三〇日)
- (6) 李瑋采氏はこの作品が「両班階級の不条理、墮落を人間の平等意識に照らし」、「階級制度の矛盾を告発している」と評価しており、また黄正鉉氏も「再逢春」の叙述目的が「身分と人格は別個の問題であつて、封建的身分制度によって人を評価することへの批判」にあると指摘している。李瑋采「李相協の作品と小説意識」(『新文学と時代意識』一九八一年一月) 黄正鉉「新小説に現れた啓蒙意識と近代意識の形象化の問題」(『新小説研究』一九九七年一月) 八八頁。
- (7) 東洋書院が刊行した小説は他にも多数あるが、たとえば、徳富蘆花の『不如帰』の翻案小説である金字鎮の『榴花雨』が、同広告文にも掲載されている。東洋書院は「日本語学習書」、「初等教科用地理歴史(朝鮮総督府検定)」——日本の地理・歴史教科書——を専売している出版社でもある。
- (8) 一九一一年ソウルの日本人経営の劇場における「想夫憐」の上演状況。  
上演日 劇場 劇団  
一月 京城座 兄弟義団  
三月 寿座 立志団  
七月 歌舞伎座 木村猛夫一行  
一〇月 寿座 後藤良助一行
- (9) この劇団「文秀星」を率いた尹白南は「再逢春」の著者である李相協と一緒に『毎日申報』の特派記者であり、翻案劇「想夫憐」だけでなく数多くの日本演劇の翻案を一九一〇年代初期において公演している点においても注目される。
- (10) 【想夫憐】  
書誌 初『読売新聞』(1903.6.23. ~ 1903.9.4) 東洋書院(上) (1912.8)  
単行本今古堂書店 (1904.2.) 二版(1923)  
分量 p219 (68回) p209 (上ト)  
文体 雅俗折衷 新小説の文体
- (11) 「白丁」というのは、屠畜業や皮革匠、柳器匠などをなりわいとし、差別と偏見の眼で見られ、常民との結婚は禁じられ、居住地も同類だ



- けが集まって白丁村を形成していたとされる。姜在彦『世界の都市の物語 ソウル』（文春文庫 一九九八年一月）
- (12) 金玉均をはじめ、朴泳孝、俞吉潐、徐在弼らに代表される急進開化派によって一八七八年組織された政治結社である。韓国において近代的身分改革を最も早い時期に試みたのは、この「開化党」を中心とした甲申政変（一八八四年）であったが、明治維新をモデルにした「開化党」の試みは、政治的には両班制国家体制を近代国民国家体制に改革し、経済的には近代資本主義体制を樹立することであった。甲申政変（一八八四年）は失敗に終わったが、開化党政府の改革は「門閥廃止」、「人民平等権の制定」、「能力による人材登用」など、当時としては革新的な内容であった。柳洪烈「甲申政変」（『韓国史』16 国史編纂委員会、一九八一年）参照。
- (13) 岡保生「日本の家庭小説 渡辺霞亭論」（『大衆文学研究』一四号一九六五年八月）
- (14) 小熊氏は「国民国家は、動員の対象たる『国民』へ加入することは、旧来の身分秩序から脱出して平等な権利を獲得する手段であるという思想を掲げた」といい、そして徴兵や納税によって「国民」としての義務と貢献をはたした者（男子高額納税者）から、「国民」たる平等な権利が与えられていたと指摘している。小熊英二「日本人の境界」（新曜社、一九九八年）参照。
- (15) これを書いた大倉桃郎という当時無名であった作者が小説の主人公と同じように戦争に行ってしまったため、作者探しから話題にもなった作品だが、当時『大阪朝日』連載小説欄の常連であった霞亭は、自分の前年度の作品『想夫憐』と同じモチーフを扱ったこの作品の作家探しにも携わっていた。『琵琶歌』の序文（瀬沼茂樹「解題」『明治文学全集93明治家庭小説集』一九七九年六月）
- (16) 甲午改革ともいう。この改革は一八八四年における開化派政府の政綱を発展させ、甲午農民戦争における農民軍側の弊政改革要求などを反映したもので、韓国近代化のうえで大きな痕跡を残した。この国政の大綱をのべたものが洪法一四条であるが、その中一四条が「人を両班・常民の貴賤を問わない人材本位による官吏の登用」であった。
- (17) 姜在彦、前掲書。
- (18) 一九一〇年天賦人權論（俞吉潐「人民の権利」『西遊見聞』第四篇）に立脚した奴婢解放が説かれた。ここでは韓国が「政治刷新」と「社会改良」「門閥打破」「生命尊重」する、「奴隸放釈（解放）」の問題が至急であることを指摘している。「奴隸放釈説」（『皇城新聞』一九一〇年七月一六日～七月一七日）参照。「文明開化した風俗と法律、規則、考え方、志し、行動様式を学び、朝鮮を世界各国の勃起の上に上等国として参入させよ」（『論説』『独立新聞』一八九七年二月三日）